

戦国策卷第六

秦四

八十六、秦取楚漢中

秦、楚の漢中を取り、再び藍田に戦い、大いに楚軍を敗る。韓・魏、楚の困しめるを聞き、乃ち南襲して鄧に至る。楚王、引いて歸る。後、三國（齊・韓・魏）、楚を攻めんことを謀り、秦の救わんことを恐るるなり。或るひと薛公に説く、「使いを發し楚に告げて、今、三國の兵且に楚を去らんとす。楚、能く應じて共に秦を攻めば、藍田と雖も豈に得難からんや。況んや楚の故地に於いてをや、と曰しむ可し。楚、秦の未だ必ずしも己を救わざらんことを疑う。而るに今三國の辭に云（札記：鮑は「去」を改めて「云」と為す）わば、則ち楚の之に應ずるや必ず勸まん。是れ楚、三國と秦に兵を出ださんことを謀るなり。秦、之を知ること為さば、必ず救わざるなり。三國、疾く楚を攻めば、楚必ず秦に走り以て急を告（姚校：一本「以」の下に「告」の字有り）げん。秦、愈々敢て出でじ。則ち是れ我、秦を離して楚を攻むるなり。兵必ず功有らん。」薛公曰く、「善し。」遂に重使を發して楚に之かきむ。楚の之に應ずること果して勸む。是に於いて三國、力を并せて楚を攻む。楚果して急を秦に告ぐ。秦遂に敢て出でず。兵、大いに勝ち（姚校：「臣」を曾は「勝」に作る）功有り。

八十七、薛公入魏而出齊女

薛公、魏に入りて齊女を出だす（薛公は齊王と不仲になり、魏に之き相となり、齊王の女が魏王の夫人と為っていたので、これを追い出した）。韓春、秦王に謂いて曰く、「何ぞ取りて妻と為さざる。齊・秦を以て魏を劫かさば、則ち上黨は秦の有ならん。齊・秦合して負芻（齊女が生んだ王子）を立てん。負芻立ちて、其の母秦に在らば、則ち魏は秦の縣ならんのみ。眠（ビン、魏の臣）、齊・秦を以て魏を劫して薛公を困しめんと欲す。佐（負芻の諸兄）、其の弟を定めんと欲す。臣請う、王の為に眠と佐とに囚らん。魏懼れて之（齊女）を復し、負芻は必ず魏を以て世を歿るまで秦に事えん。齊の女、魏に入らば、薛公を怨み、終に齊を以て王に奉事せん。」

八十八、三國攻秦入函谷

三國（齊・韓・魏）、秦を攻め、函谷に入る。秦王、樓緩に謂いて曰く、「三國の兵深し、寡人、河東を割きて講ぜんと欲す。」對えて曰く、「河東を割くは大費なり。國患を免るるは、大利なり。此れは父兄の任なり。王、何ぞ公子池を召して問わざる。」王、公子池を召して問う。對えて曰く、「講ずるも亦た悔い、講ぜざるも亦た悔いん。」王曰く、「何ぞや。」對えて曰く、「王、河東を割きて講ぜば、三國去ると雖も、王必ず曰わん、惜しいかな三國且に去らんとす、吾、特だ三城を以て之に従わしむ、と。此れ講の悔いなり。王、講ぜずんば、三國、函谷に入りて、咸陽必ず危うからん。王又曰わん、惜しいかな、吾三城を愛し

みて講ぜず、と。此れ又講ぜざるの悔いなり。」王曰く、「鈞しく吾悔いなば、寧ろ三城を亡いて悔いん、咸陽を危うくして悔ゆる無けん。寡人、講に決す。」卒に公子池をして三城を以て三國に講ぜしむ。三國の兵（札記：鮑は「三國」の下に「三國」の二字を補う）乃ち退く。

八十九、秦昭王謂左右曰

秦の昭王、左右に謂いて曰く、「今日の韓・魏は 始めの強きに孰れぞ。」對えて曰く、「如かざるなり。」王曰く、「今の如耳・魏齊は孟嘗・芒卯の賢に孰れぞ。」對えて曰く、「如かざるなり。」王曰く、「孟嘗・芒卯の賢を以て、強き韓・魏の兵を帥い以て秦を伐ちしかども、猶ほ寡人を奈何ともする無かりき。今、無能の如耳・魏齊を以て、弱き韓・魏を帥い以て秦を攻むるは、其れ寡人を奈何ともする無きこと、亦た明らかなり。」左右皆な曰く、「甚だ然り。」中期、琴を推して對えて曰く、「王（札記：今本「三」を「王」に作る）の天下を料ること過てり。昔者、六晉の時、智氏最も強く、范・中行を滅破し、韓・魏を帥い以て趙襄子を晉陽に囲み、晉水を決し以て晉陽に灌ぐ。城沈まざる者三板（板は版、一版は二尺）のみ。智伯出でて水を行る。韓康子御たり、魏桓子驂乘たり。智伯曰く、『始め、吾、水の人の國を亡ぼす可きを知らざりき。乃ち今、之を知る。汾水は以て安邑（魏の都）に灌ぐに利あり、絳水は以て平陽（韓の都）に灌ぐに利あり。』魏桓子、韓康子を肘し、康子、魏桓子を履んで、其の踵を躡み、肘足、車上に接して、智氏分たれ、身死し國亡びて、天下の笑いと為れり。今、秦の強きは、智伯に過ぐる事能わず、韓・魏弱しと雖も、尚ほ晉陽の下に在りしときに賢るなり。此れ乃ち方に其の肘足を用うる時なり。願わくは王の易（あなどる）る勿らんことを。」

九十、楚魏戰於陘山

楚・魏、陘山に戦う。魏、秦に許すに上洛を以てし、以て秦を楚に絶たしむ。魏、戦いて勝ち、楚、南陽に敗る。秦、賂を魏に責（もとめる）む。魏、與えず。營淺、秦王に謂いて曰く、「王、何ぞ楚王に謂いて、魏、寡人に許すに地を以てし、今、戦いて勝ち、魏王、寡人に倍くなり。王何ぞ寡人と遇わず。魏、秦・楚の合せんことを畏れ、必ず秦に地を與えん。是れ魏は楚に勝ちて地を秦に亡うなり。是れ王、魏の地を以て寡人に徳するなり。秦の楚に之く者は資多し。魏は弱し、若し地を出さずんば、則ち王、其の南を攻め、寡人、其の西を絶たん、魏必ず危うからん、と曰ざる。」秦王曰く、「善し。」是を以て楚に告ぐ。楚王、秦と遇うを揚言す（公然と言いふらす）。魏王、之を聞き恐れて、上洛を秦に效す。

九十一、楚使者景鯉在秦

楚の使者景鯉、秦に在り、秦王に従い魏王と境に遇う。楚怒る。秦、周冢をして（合を令に改める）楚王に謂（為を謂に改める）わしめて曰く、「魏は楚と遇う無くして秦に合せんことを請う。是を以て鯉、之と遇えるなり。弊邑の與に遇うに於いて之を善しとす。故に齊、合せざるなり。」楚王因りて景鯉を罪せずして周・秦を徳とす。

九十二、楚王使景鯉如秦

楚王、景鯉をして秦に如かしむ。客、秦王に謂いて曰く、「景鯉は楚王の（姚校：一本「使景」の二字無し）甚だ愛する所なり。王、之を留め以て地を市うには如かず。楚王聽かば、則ち兵を用いずして地を得ん。楚王聽かずんば、則ち景鯉を殺して、更めて景鯉に如かざる者（札記：今本、上の「不」の字無し、「留」を改めて「者」と為す）と市え（王念孫により「市」の字を補う）。是れ便計なり。」秦王乃ち景鯉を留む。景鯉、人をして秦王に説かしめて曰く、「臣、王の權、天下に軽くして、地得可からざるを見るなり。臣の來り使するや、齊・魏皆な且に地を割き以て秦に事えんとすと聞けり。然る所以の者は、秦の楚と昆弟の國為るを以てなり。今、大王、臣を留むるは、是れ天下に楚無きを示すなり。齊・魏有（また）た何ぞ孤國を重んぜん。楚、秦の孤を知らば、地を與えずして、外交わりを諸侯に結び、以て圖らん。則ち社稷必ず危うからん。臣を出さんには如かず。」秦王乃ち之を出す。

九十三、秦王欲見頓弱

秦王、頓弱を見んと欲す。頓弱曰く、「臣の義、參拜せず。王能く臣をして拜すること無からしめば、即ち可なり。不ずんば、即ち見えざるなり。」秦王、之を許す。是に於いて頓子曰く、「天下、其の實有りて其の名無き者有り（姚校：一本「有」の字の下に更に「有」の字有り）、其の實無くして其の名有る者有り、其の名無く又其の實無き者有り。王之を知るか。」王曰く、「知らず。」頓子曰く、「其の實有りて其の名無き者は、商人是れなり。銚（くわ）を把り耨（すき）を推すの勢い無くして、積粟の實有り、此れ其の實有りて其の名無き者なり。其の實無くして其の名有る者は、農夫是れなり。凍（凍土）を解きて耕し、背を暴して耨（くさぎる）り、積粟の實無し、此れ其の實無くして其の名有る者なり。其の名無く又其の實無き者は、王乃ち是れなり。已に立ちて萬乗為れども、孝の名無く、千里を以て養えども、孝の實無し。」秦王悖然として怒る。頓弱曰く、「山東の戰國、六有り。威、山東を掩わずして、母を掩う（嫪アイと通じた母を雍門宮に幽閉したことを指す）。臣竊かに大王の為に取らざるなり。」秦王曰く、「山東の戰（札記：「建」を鮑本は「戰」に作る）國は兼ぬ可きか。」

頓子曰く、「韓は天下の咽喉なり、魏は天下の胸腹なり。王、臣に萬金を資（もたらす）せて遊ばしめ、韓・魏に之くを聽（ゆるす）さば、其の社稷の臣を秦に入れん、即ち韓・魏は従わん。韓・魏従わば、而して天下圖る可きなり。」秦王曰く、「寡人の國貧しくて、恐らくは給すること能わざらん。」頓子曰く、「天下未だ嘗て事無くんばあらざるなり。従に非ずんば即ち横なり。横成らば、則ち秦は帝たらん、従成らば、即ち楚は王たらん。秦帝たれば、即ち天下を以て恭養せん。楚、王たらば、即ち王、萬金有りと雖も、私するを得ざらん。」秦王曰く、「善し。」乃ち萬金を資せて、東のかた韓・魏に遊んで、其の將相を入れ、北のかた燕・趙に遊んで、李牧を殺さしむ。齊王、入朝し、四國（韓・魏・趙・燕）必（ことごとく）く従う。頓子の説なり。

九十四、頃襄王二十年

頃襄王（楚の王）二十年、秦の白起、楚の西陵を抜き、或いは鄢・郢・夷陵を抜き、先王の墓を焼く。王、東北に徙り、陳城に保す。楚遂に削弱せられ、秦の輕んずる所と為る。是に於いて白起又兵を將いて來り伐つ。楚人に黃歇なる者有り。遊學して博聞なり。襄王以て辯と為す。故に秦に使わす。昭王に説いて曰く、「天下、秦・楚より強きもの莫し。今聞く、大王、楚を伐たんと欲す、と。此れ猶ほ兩虎相い闘いて、驚犬、其の弊を受くるがごとし。楚を善くするに如かず。臣請う、其の説を言わん。臣之を聞く、物至（きわまる）れば而（すなわち）ち反る、冬夏是れなり。致至れば而ち危うし、累棋（積み重ねた碁石）是れなり、と。今大國の地は天下に半ばして、二垂を有つ。此れ生民従り以來、萬乗の地未だ嘗て有らざるなり。先帝文王・莊王・王の身、三世にして地を齊に接せず、以て従親の要を絶つ。今王、（札記：今本「三」の字無し）成橋をして事を韓に守らしめ、成橋已（札記：鮑は「以」を改めて「已」と為す）に北のかた燕を入る。是れ王、甲を用いず、威を伸ばさずして百里の地を出ださしむ。王、能と謂う可し。王又た甲兵を擧げて魏を攻め、大梁の門を杜ぎ、河内擧げ、燕（魏の南燕）・酸棗を抜き、桃人（邑の名）を虚しうせるに、楚・魏（札記：吳氏補に曰く、『史』は「魏之兵」に作る）の兵、雲翔（札記：「云」を鮑本は「雲」に作る）して敢て校（交戦）せず。王の功亦た多し。王、申（かさねる）て衆を息うる事二年、然る後、之を復し、又た蒲・衍・首垣を取り、以て仁・平丘（札記：鮑は「兵」を改めて「丘」と為す）に臨み、小黃・浚陽は城を嬰（めぐらす、籠城させるの意）らしめ、而して魏氏服せり。王又濮・磨の北を割きて之を燕に屬し、齊・韓（秦を韓に改める）の要を斷ち、楚・魏の脊を絶つ。天下、五合六聚して敢て救わざるなり。王の威亦た憚（さかん）なり。王若し能く功を持し威を守り、攻伐の心を省きて、仁義の地（札記：吳氏補に曰く、「誠」を『史』は「地」に作る。道の意）を肥やし、復た後患無か

らしめば、三王も四とするに足らず、五伯も六とするに足らざるなり。王若し人徒の衆を負み。兵甲の強を恃（札記：鮑は「材」を改めて「恃」と為す）みて、魏氏を毀るの威に乗（札記：呉氏補に曰く、『史』は「乗」に作る）じて、力を以て天下の主を臣とせんと欲せば、臣、後患有らんことを恐る。詩に云う、『初め有らざる靡し、克く終り有る鮮し。』易に曰く、『狐、其の尾を濡らす（狐も川を渡り始めたときは、尾を濡らさないように用心しているが、岸に近づくと安心して濡らしてしまう）。』此れ始の易く、終の難きを言うなり。何を以て其の然るを知るや。智氏は、趙を伐つの利を見て、榆次の禍を知らざるなり。呉、齊を伐つの便を見て、干隧の敗を知らざるなり。此の二國は、大功無きに非ざるなり。利を前に没（札記：鮑は「設」を改めて「没」に作る。むさぼると訓ず）りて、患を後に易（あなどる）ればなり。呉の越を信ずるや、従えて齊を伐ち、既に齊人に艾陵に勝ち、還りて越王の為に三江の浦に禽にせらる。智氏は韓・魏を信じて、従えて趙を伐ち、晉陽の城を攻め、勝つこと日有りて、韓・魏、之に反し、智伯瑤を鑿台の上に殺せり。今、王、楚の毀れざるを妬みて、楚を毀ることの韓・魏（札記：呉氏補に曰く、『史』は「韓魏」に作る）を強くするを忘るるなり。臣、大王の為に慮りて取らず。詩に云う、『大武は遠宅涉らず。』此れに従りて之を觀れば、楚國は援なり、鄰國は敵なり。詩に云う、『他人に心有り、予、之を忖度（ソン・タク、他人の心を推し量る）す。躍躍たる龜兔、犬に遇いて之を獲らる。』今、王、中道にして韓・魏の王に善きを信ずるなり。此れ正に呉の越を信ずるなり。臣聞く、敵は易る可からず、時は失う可からず、と。臣、韓・魏の辭を卑くし患いを慮りて、實は大國を欺かんことを恐るるなり。此れ何ぞや。王既に韓・魏に重世の徳無くして、累世の怨み有り。韓・魏の父子兄弟、踵を接いで秦に死する者、百世なり。本國は残われ、社稷は壞れ、宗廟隳（こぼつ）たる。腹を刳き頤を折き、首身份離して、骨を草澤に暴し、頭顱（ズ・ロ、頭蓋骨）僵（たおれる）れ仆し、境に相い望めり。父子老弱、系虜せられて、路に相い隨う。鬼神狐祥（死者の靈魂がさまよっている）して、食む所無く、百姓、生を聊（やすんず）ぜず、族類離散し、流亡して臣妾と為り、海内に満てり。韓・魏の亡びざるは、秦の社稷の憂なり。今、王の楚を攻むるは、亦た失せずや。且（札記：「是」を鮑本は「且」に作る）つ王、楚を攻むるの日、則ち悪くにか兵を出さんとする。王、將に路を仇讎の韓・魏に籍らんとするか。兵出づるの日は、王、其の反らざるを憂えん。是れ王、兵を以て仇讎の韓・魏に資するなり。王、若し路を仇讎の韓・魏に籍らざば、必ず隨陽・右壤を攻めん（姚校：一本「攻」の字の下に「隨」の字有り）。隨陽・右壤は此れ皆な廣川大水、山林溪谷、不食の地なり。王、之を有つと雖も、地を得たりと為さず。是れ王、楚を毀るの名有りて、地を得るの實無きなり。且つ王の楚を攻むるの日は、四國（趙・韓・魏・齊）必ず悉く起ちて王に應ぜん

(札記：鮑は上の「應」の字を衍とす)。秦・楚の構えて離れずんば、魏氏將に兵を出して留・方與・銓・胡陵・碭・蕭、相を攻めんとし、故の宋は必ず盡きん(この七邑は元は宋の邑であったが、この時は楚の領土となっていた)。齊人、南面せば、泗北は必ず擧がらん。此れ皆な平原四達、膏腴の地なり。而るを王、之をして獨り攻めしむ。王、楚を破り(姚校：劉本「於」の字無し)以て韓・魏を中國に肥やして、齊を勁くせば、韓・魏の強きは以て秦に校するに足る。齊、南は泗を以て境と為し、東は海を負い、北は河に倚りて、後患無く、天下の國、齊より強きものは莫けん。齊・魏、地を得、利を葆ちて、詳りて下吏に事えば、一年の後は、帝為らん。若し未だ能わずとするも、以て王の帝為るを禁ずるに於いては餘有らん。夫れ王の壤土の博き、人徒の衆き、兵革の強きを以てして、一たび事(札記：丕烈案ずるに、『史記』『新序』は「衆」を「事」に作る)を擧げて、地を楚に注(つづける)け、令を韓・魏に誦して、帝の重きを齊に帰せしむるは、是れ王の失計なり。臣、王の為に慮るに、楚に善くするに若くは莫し。秦・楚合して一と為し、以て韓に臨まば、韓必ず首を授けん。王、襟とするに山東の險を以てし、帶とするに河曲の利を以てせば、韓必ず関中の侯為らん。是の若くにして、王、十萬を以て鄭(韓の都)を戍(札記：今本「十」の下に「萬」の字有り、「戍」を「戍」に作る)らば、梁氏寒心して、許・鄆陵は城を嬰(めぐらす)し、上蔡・召陵は往來せざらん。此くの如くにして、魏も亦た關内の侯たらん。王一たび楚に善くせば、關内に二つの萬乗の主あり。地を齊に注(つづる)れば、齊の右壤は手を拱きて取る可し。是れ王の地、一に兩海に経(札記：今本「任」を「経」に作る。わたると訓ず)り、天下を要絶(要は取る、悉く取ること)するなり。是れ燕・趙は齊・楚無く、齊・楚(札記：鮑は「齊楚」の下に「齊楚」二字を補う)は燕・趙無きなり。然る後、燕・趙を危動(動揺させること)し、齊・楚を持せば、此の四國は、痛みを待たずして服せん。」

九十五、或為六國說秦王

或ひと六國の為に秦王(始皇帝)に説いて曰く、「土廣きも、以て安しと為すに足らず、人衆きも、以て強しと為すに足らず。若し土廣き者安く、人衆き者強ければ、則ち桀・紂の後も將に存せんとす。昔者、趙氏も亦た嘗て強くして、曰く、趙の強きこと何若なりしぞ。左を擧ぐれば齊を案え、右を擧ぐれば魏を案え、萬乗の國を厭案(ヨウ・アン、制圧する)し、二國は千乗の宋なり。剛平に築きて、衛、東野無く、芻(スウ、まぐさを刈るもの)牧(牧畜をするもの)薪采(薪を採るもの)、敢て東門を窺う莫し。是の時に當り、衛は累卵よりも危うし。天下の士相い従いて謀りて曰く、『吾將た其の委質(イ・シ、士が君

主に仕えるときに、差し出す土産)を還し(返してもらい)、而して邯鄲の君に朝せんか。』是に於いて天下に邯鄲を伐たんと稱する者有り、暮れ(札記：丕烈案ずるに、此れは當に「不」の字を衍とすべし、「莫」は即ち「暮」の字なり)に令して朝に行わる。魏、邯鄲を伐ち、因りて退きて逢澤の遇(遇は会)を為す。夏車に乗じて、夏王と稱し、天子に(為は古には于に通用した)朝し、天下皆な従う。齊の太公(田和)之を聞き、兵を擧げて魏を伐つ。壤地兩分して、國家大いに危うし。梁王身ら質を抱き璧を執り、陳侯(齊の太公)の臣と為らんと請う。天下乃ち梁を釋す。郢(楚)の威王之を聞き、寝ねて寐ず、食して飽かず。天下の百姓を帥いて、以て申縛(シン・テン、齊の將)と泗水の上に遇い、而して大いに申縛を敗る。趙人之を聞き枝桑に至り、燕人之を聞き格道に至る。格道、通ぜず、平・際絶ゆ。齊戦い敗れて勝たず、謀れば則ち得ず。陳毛をして劍を釋き撮委(撮を撮の誤りとし、撮委で布冠)して、南のかた罪を聽(うける)け、西のかた趙に説き、北のかた燕に説かしめ、内は其の百姓を喻し、而して天下乃ち齊を釋す。是に於いて夫れ薄を積みて厚と為し、少を聚めて多と為し、以て同じく郢の威王を側牖(ソク・ユウ、片隅の明り取りの窓、姚校：「紂」は當に「牖」と為すべし)の間に言えり。臣豈に郢の威王を以て政衰え謀亂れて以て此に至ると為さんや。郢、天下の諸侯に強臨するが為に、故に天下、之を伐たんと樂うなり」